

シンポジア

第9回農薬残留分析研究会

昭和60年11月6, 7日

於 熊本県本渡市国民宿舎天草シーサイドホテル

主催 日本農薬学会

表記の研究会は昭和60年11月6, 7日の両日、熊本県本渡市の国民宿舎天草シーサイドホテルで70余名が参加して行なわれた。参加者のほとんどは前日の11月5日の夕刻までに会場となった宿舎に到着しており、6日は午前9時より農薬残留分析研究委員会委員長の福永一夫氏の挨拶によって始められ下記の15題の話題提供があった。

1. 新規殺虫剤 MTI-500 の残留分析法

°高橋克典, 三井治子, 山谷茂美
石川忠博, 入交 毅
(三井東圧化学(株)農薬研究所)

2. グアザチン残留分析の簡易化—内部標準物質の採用とシリカゲル濃縮—

吉川典孝, °森 芳計, 片岡安克
(大日本インキ化学工業(株)バイオ技術1グループ)

3. 新規殺ダニ剤ヘキシチアゾクスの残留分析法および作物残留の実態について

°時枝正則, 立花輝雄, 小林 茂
五明 健, 小野成男
(日本曹達(株)安全性研究所)

4. グルホシネートおよびその代謝生成物の作物における残留分析法

°鈴木厚士
(ヘキストジャパン(株)総合開発研究所)

5. 残留分析の自動化

°廣田政隆, 大西純一, 鈴木克次
松田 正, 宮本純之
(住友化学工業(株)安全性研究所)

6. 気中濃度測定における各種捕集剤の検討

°河野謙一, 戸高 隆, 河野満雄
(宮崎県総農試)

7. 農薬の環境残留マルチ分析法の検討

山上富貴子, 今泉則子, 前川吉明, °加藤誠哉
(財)日本食品分析センター)

8. 植物体中の IAA 分析法

°飯塚宏栄 (農環研)

9. 高速液体クロマトグラフィーによる臭化メチルくん蒸試料中の全臭素定量法

°島村裕二, 志賀直史, 俣野修身, 後藤真康
(財)残留農薬研究所)

10. 殺菌剤ジネブの数種作物における残留と分析, サンプルング上の問題点について

須田鉄弥 (群馬県農総試)
°中村幸二 (埼玉県農試)
丸 論 (千葉県農試)
能勢和夫 (農環研)

11. 環境庁告示による残留農薬分析法の傾向

°後藤真康 ((財)残留農薬研究所)

12. 平塚市周辺河川水中の農薬残留実態調査

°巻淵 進, 園田正則, 井上道代
(全農農技センター農薬研究所)

13. 2,4,5-T系除草剤埋没周辺土壌の残留分析

°築地邦晃 (岩手県農試)

14. 児島湖周辺の環境における除草剤オキサジアゾンの挙動について

°今中雅章, 日野誠二, 剣持堅志
松永和義, 熊城一男, 石田立夫
(岡山県環境保健センター)

15. 食品中のクロルデン類の残留実態

°岡田 寛, 斎藤行生, 武田明治, 内山 充
(国立衛生試験所)

後藤真康, 能勢和夫, 加藤誠哉, 堀 克也の4氏の座長の進行のもとで, 学会の大会と異なり質疑時間を含めて一人の持時間が25分であったが, 予定時間を超過するような熱心な討議が行なわれた。

例年と異なり, 今年は特別講演を計画しなかったが, 午前と午後の講演の間に能勢和夫氏による「インドネシアにおける農薬分析の現状」の講演とスライド映写が行

なわれ、氏の国際協力事業団によるインドネシア作物保護強化計画にもとづく派遣専門家としての体験を通して同国における農薬使用、検査や残留分析の研究体制について語られ、技術協力の必要性を強調されたのが印象的であった。

研究会の終了後は同一会場で懇親会がもたれ、熊本県農試場長の挨拶に続いて佐藤六郎氏の乾盃の音頭とともに、九州は熊本の天草ならではの種々の海の幸に舌つづみを打ち、焼酎の盃をくみかわして親睦の一時を過ごした。

翌7日は心配された天候のくずれもなく、かえって暑いほどの晴天に恵まれた中、バスによる天草農業の見学会が行なわれた。地元天草農業研究指導所長太田譲一氏と天草農業改良普及所長泉 康夫氏の案内で天草下島をほぼ半周するコースを巡り、無霜地帯という地の利を生かしたレタス栽培やマメ科野菜の畑、名物唐イモのこと、夏の渇水为了避免して水稻は早期栽培が行なわれることなど詳しい資料を準備していただいて、車中で解説を伺ったり、農地を見学したりした。もちろん途中の文学碑や天草の文化を特徴づけるキリスト教関係の史跡も見ることができた。出発してから熊本市内まで約200キロの強行軍であったが、次の大会あるいは研究会での再会を約して熊本駅と熊本空港から帰途につき、本研究会を無事終了することができた。

農薬残留分析研究会はこれまで農薬科学シンポジウムの前日に開かれることが多く、また、去年は農薬製剤施用法研究会にひきつづいて行なわれた。今回のように本研究会を単独に開くのは初めてであり、しかも熊本県内でもかなり遠隔の地で開催して参加者がどのくらいになるか当初は不安であった。学会誌を通して7月31日を締切日として話題提供と参加者を募ったが、講演申込の

問合せはまずまずであったものの期日までの参加者は30名足らず。委員の方々にお願いしてPRをしていたが、要旨の印刷を発注する頃になって申込みが増え出し、60名を越える状況となった。前述のとおり今回の研究会ではバスによる現地検討会を予定しており、バスの定員に限りがあるので乗れない方をどうするか心配になってきた。60名を越えた段階でその後の申込者には現地検討会に参加できない旨ことわり状を同封して受付けたが、帰途の予定などから現地検討会不参加の方もあり、また熊本農試化学第2部の方のご厚意でバスの後方を自動車にて伴走していただくなどの方法で、一部の方を除いて一応希望の方には現地検討会に参加していただくことができた。なお、やむをえずお断りした方にはご迷惑をおかけしたことを誌上を借りてお詫び申し上げる。今回の研究会の参加者は企業関係者40名、国公立試験研究機関23名、団体10名、大学2名であったが、異色の参加者として東京農大と残農研に北京から留学中の梁 渡湘氏とインドから農環研に留学中のラリタ・クマリさんがおられた。

本研究会は熊本県農試化学第2部堀 克也氏と九州農試虫害2研風野 光の両名を世話人として開催したが、上記2研究室のメンバーはもとより地元天草の関係者、日本植物防疫協会と日本植物調節剤研究協会の方とに種々お世話になったことを記し感謝のしるしとしたい。

なお、本研究会の発表はスライドを使わないので講演要旨は1講演あたり5ページを費やして図表も掲載されている。今回の要旨も若干の余部があるのでご希望の方は学会事務局に問い合わせていただきたい。

(九州農試 風野 光)